



第 10 号
2010 (平成 22) 年 6 月 15 日
映画英語教育学会 九州支部事務局 発行

〒803-0835 福岡県北九州市小倉北区井堀 1-3-5
西南女学院大学 人文学部 八尋春海 研究室
TEL/FAX: 093-583-5720
E-mail: kyushu_office@atem.org
URL: <http://www.atem.org/kyushu/index.html>
編集: 與古光 宏・浦田 毅彦・中村 茂徳

Contents		
Page 1 巻頭言	Page 2 第 11 回支部大会ルポ	Page 3 映画『ソッキウ』 / 第 15 回全国大会誌
Page 4 映画のトビア / 第 12 回支部大会案内	Page 5 第 16 回全国大会案内 / 九州支部会員	出版案内 / 新会員自己紹介 / 編集後記

「字幕」ブーム!?

映画英語教育学会 九州支部

HP 副編集長 篠原 一英 (福岡県立久留米筑水高等学校)

2008 年 7 月の夏休み前に、勤務先の高校の英語科宛てに来ていた数多くの郵便物を整理していると、たまたま『字幕翻訳コンクール』という案内が目にとまりました。戸田奈津子さんが審査委員長ということで、面白い取り組みだなあとウェブサイト調べてみました。HP によると、8 月公開の『ナイト・ミュージアム 2』の 1 シーンのセリフを翻訳し応募すると、最優秀賞にはアメリカ往復航空券 + 10 万円が準備されており、20 名以上で団体応募すると、団体奨励賞として全員にもれなく映画鑑賞券が贈られるという企画でした。3 つのシーンが準備され、中学生以下の部、高校生の部、大学生・一般の部と分かれており、高校生でも充分に取り組める内容でした。他の先生方にも呼びかけたところ、学校全体で応募しましょうということになり、ちょうど夏休み前で生徒の学習意欲も衰える頃に、授業 1 時間を使って実施しました。

この映画に関心がある生徒も多く、また映画鑑賞券が必ずもらえるということで、意外と (?) 生徒からの反響がありました。どの生徒も熱心に取り組み、字幕翻訳のルールに苦しみながらも、立派な作品を作り上げました。単なる翻訳ではなく、字幕の字数制限の中で、場面の状況や雰囲気、登場人物の性格などを反映した言葉を探さなければなりません。言葉に対する感性を研ぎ澄まし、字幕を完成させていました。

彼らには「若い」感性があり、我々教師が思いもよらない字幕を作っていました。この年代だからこそ生み出せる、「若さ」に満ちた字幕ができるのです。この「若さ」には敵わないなあ、と同僚の先生

方も感じていました。

結局、全校で 450 名近くが応募しました。映画鑑賞券が公開直前に送られて来て、生徒にとっては良い夏休みのプレゼントになりました。生徒からは、「映画面白かったです。有難うございました」と感謝され、来年もぜひ行いたいと思いました。

昨年 9 月 5 日 (土) に開催されました、映画英語教育学会・第 11 回九州支部大会でも、この『字幕翻訳コンクール』を改変した、「字幕翻訳にチャレンジ!」と題したワークショップを行いました。字幕翻訳の難しさや楽しさを、少しでも味わって頂けたのではないかと自負しております。

この九州支部大会では、福岡医療短期大学の高瀬先生が、「新しい『超字幕』ソフトを使った映画英語」と題して研究発表をされました。これは、ソースネクスト社の『超字幕』シリーズの映画ソフトで、日英字幕を ON/OFF したり、セリフ単位で反復練習したりできる優れたもので、私も早速『不都合な真実』を購入し、「厳選フレーズ 30」を授業の最初に使って反復練習させています。

このように、映画を使って生きた英語を学ぶのは、時代のニーズに適っていると思います。映画英語教育学会は、まさにこの時代のニーズに即していると言えます。私もこの学会、特に九州支部の皆さんから、得るものが非常に大きいと思っております。さらなる会員数の拡大を図り、これからも九州支部がますます発展することを祈念しております。

第11回支部大会ルポ

振り返ってみますと、この映画英語教育学会・九州支部大会が初めて開催されましたのは、2000年3月のこと。それから10年(decade)という一つの歴史を重ねた後で、新たな10年を歩み出した第11回大会が、昨年9月5日(土)に、北九州市の西南女学院大学にて開催されました。事務局長の八尋先生、会計監査委員の林先生が教鞭を執っておられる伝統校であり、上述の記念すべき第1回大会の開催校でもあります。

さて、今大会の目玉は、篠原一英先生(福岡県立久留米筑水高等学校)、小林明子先生(福岡県立中間高等学校)のお二方による「ワークショップ」。

篠原先生には、毎年生徒さんたちに挑戦させていらっしゃるという、「字幕翻訳」に関するコツを伝授して頂きました(先生ご執筆の『巻頭言』参照)。実際に、映画『ナイト・ミュージアム2』からの英語台詞を、日本語字幕に変換する作業をしてみました。改めて文字数制限に四苦八苦。この分野の第一人者でいらっしゃる戸田奈津子さんが、毎回重ねておられるに違いない苦労苦心とはこのようなものか、と思いきると同時に、限られた量の文字で如何に表現するか、まるで俳句や短歌作りを思わせる刺激を味わうことが出来ました。

小林先生は、映画のレビュー(批評文)を英語で書かせることで、学習者の英作文力を養う取り組みをご紹介下さいました。小生も、ソーシャル・ネットワークワーキング・サイト『mixi』にて、たまに映画や書評...とは行かずとも、感想を書くことがありますが、その様々な感想を、しかも英語で書くとなると、確かに骨が折れるもの。その英語版レビューにおけるノウハウの基本を、持ち味である元気一杯の明るさを交えて教えて下さった、小林先生。

普段、学生・生徒を相手に授業を行っている側から、逆に教わる側への視点の転換が心地良かったばかりでなく、気が付けば、いつの間にか身を乗り出してしまふ、参加者を飽きさせない創意工夫の数々。楽しいワークショップを披露して下さい、経験豊富なお二方には、会場から大きな拍手が贈られました。

その後行われた研究発表は、以下の通りです：

第1室

- (1) 「パワーポイントを利用した授業展開」
大木 正明 先生
(大分工業高等専門学校)
- (2) 「新しい『超字幕』ソフトを使った映画英語 -映画『BLACK RAIN』を駆使する-」
高瀬 文広 先生
(福岡医療短期大学)
- (3) 「話下手に学ぶ話し方」
秋好 礼子 先生
(福岡大学)
- (4) “Using Films to Teach Politeness Markers”
Jay Lake 先生
(福岡女学院大学短期大学部)

第2室

- (1) 「英語の呼びかけ語について」
林 裕二 先生
(西南女学院大学)
- (2) 「授業における、名作映画の文学的分析」
村田 季巳子 先生
(西南女学院大学)
- (3) “The Rhetorical Structures and Linguistic Features of Online Movie Plot Summaries”
Jack Brajcich 先生
(福岡女学院大学短期大学部)
- (4) 「高校における英語授業での映画活用法の一考察」
篠原 一英 先生
(福岡県立久留米筑水高等学校)

ところで、このATEM九州支部大会名物の、洋画のワンシーン映像からその作品名を当てる、「映画オタクコンテスト」。毎回、事務局長の八尋先生作成の、その手作り感溢れる問題の数々に、参加者一同積極果敢に挑戦しておりますが、今回は何と、映像を一切使用しない“ペーパーテスト”！第11回を迎えての新機軸登場(!?)でありました。

余談ですが、私の場合、ワンシーン映像があった過去のコンテストより、今大会での成績の方が良かったというのは...一体どういうことでしょうか？

(文責：與古光 宏)



ワークショップにて講演中の篠原先生(上)、小林先生(下)
(撮影：浦田 毅彦 先生 [福岡市立壱岐中学校])

映画ショッキング vol. 10

～あなたの鼻は、どんな鼻？～

私が小さい頃、母は魔女だった。「レイチャンノオハナ、タカクナレカークナーレ！」私の母は、よくこの呪文を唱えた。鏡なんてこの世からなくなればいいのにと思っているずぼらな二人の娘たちとは違って、母はお洒落な人で、小さい頃の私は、母が三面鏡の前でお化粧をしているのを見るのが大好きだった。鏡の前に母が座っているのに気づくとすぐにすり寄ったものだが、そんな時母はいつも私の鼻をつまんで、かの呪文を唱えた。それは白雪姫の継母の逆バージョン、娘を少しでもきれいにしたいと思う母心だったのだろう。

しかし、憂うべきは鼻だけではなかった。一重の重々しいまぶた、長い胴、太く短い足、母が呪文をかけるべき所は他にもあったはずなのに、彼女はなぜか鼻にご執心だった。そんな思い出を持つ私のお勧め映画は、『ペネロピ』(Penelope, 2006年)。先祖がしてかした過ち故に魔女の恨みを買ひ、その魔女にかけられた魔法のせいで、豚の鼻と耳を持って生まれた女の子の話だ。自分たちと同等の名家の子息と結婚すれば魔法が解けるといふ言い伝えを信じ、両親は娘ペネロピを豪華なお屋敷の中だけで大事に育て、年頃になるとお見合いをさせるのに必死。最初から顔を見せると逃げられるため、マジックミラー越しのお見合いなのだが、姿を現すや否や、全員悲鳴をあげて逃げ去るばかり。

やっとな運命の人ではないかと思う相手に出会い、ペネロピ自ら決死のプロポーズをするも、拒否される。絶望の果てにペネロピはとうとう家出をする。初めての世界は何もかもが新鮮、何をしても楽しく、顔が世間にはばれてなお(自分でばらすのだが)、彼女は今までに味わったことのない自由を満喫する。しかも予想もしなかったことに、彼女の飾らない性格も手伝って、たちまち人気者になるのだ。そんな時、以前彼女の顔を見て逃げた大金持ちのお坊ちゃまが、失墜した名誉を回復すべく、プロポーズしてくる。豚鼻から解放される千載一遇のチャンス！ここで彼女は迷う。好きでもない相手と結婚して、望みの顔を得るか、それとも、今の顔を受け入れて生きて行くか…

この映画は小説にもなっている(Marilyn Kaye, Penelope, 2007)。ペネロピ自らが語るスタイル(ペネロピが知らない所で起こることは三人称の語り)を取っていて、彼女の気持ちが映画以上に切ないまでに伝わってくるので、ぜひご一読いただきたい。

「人は見た目ではない」とは口ばかりで、多くの人は自分の見た目を気にするし、他人の見た目も気になる。だからこそ、我が母は幼い娘の低い鼻を哀れに思い、愛情を込めて呪文をかけた。その成果はかけらも見られないが、ペネロピ同様自分を受け入れ、今日も私は元気に生きている。

次回は、市川先生にお願いします。

(秋好 礼子)

第15回全国大会レポート

第15回全国大会が、2009年6月20日(土)に神奈川県川崎市の専修大学・生田校舎で開催された。

九州支部からは高瀬先生、篠原先生、秋吉先生と私の4名のみでの参加であったが、宿泊先の新宿ワシントンホテルには、姉妹学会である韓国のSTEMからの19名も宿泊され、みんなで歓談しながら電車とバスを乗り継いで専修大学へと向かい、ちょっとしたエクスカッション気分であった。生田校舎は緑豊かな閑静な場所にあり、バス停から開催場所の10号館へ向かうのに、トンネルを抜けてエスカレーターに乗ったのが印象深い。

今回の学会のテーマは、「映画が提供する『気付き』」である。映画字幕を用いた効果的な英語学習法や、映画の中に出てくる英語表現・文法を取り扱った授業の実践方法などの発表が行われた。毎回のことながら、発表者のレジュメが大変興味深いのにもかかわらず、全部の発表を聞くことが出来ないのが残念であった。STEMからも2名の発表が行われ、韓国の英語教育のレベルの高さ、また実践的な授業展開には学ぶものが多い。

個人的に今回の学会で最も印象深かったのは、開催校である専修大学の田邊祐司先生による特別講演「映画を使った日英通訳者養成」である。大学院での授業展開方法を、ゼミの学生達を交えて実践的に公演が行われたのであるが、他大学からの聴講生を含むゼミ生達の英語能力の高さと、スキットに見られる役者さながらの豊かな表現力には驚かされた。

今回の学会では、STEMの発表者を除いて英語での発表が殆どなかったのが残念であり、今後の全国大会へ向けての課題となったようである。

(文責：熊抱 ゆかり)

映画のトリビア vol.10 ～『刑事コロンボ』に見る、原題の妙～

今回のこの『映画のトリビア』は、諸事情により、第1回に引き続き、與古光が担当させていただきます。

昨年から、NHKのBS-2およびBS-hiにて、それぞれノーカットで毎週放映されているのが、海外ドラマの名作・『刑事コロンボ (Columbo)』(1971-1990)。

ヘンリー・マンシーニ作曲の、あのプラスが効いたイントロ、および口笛が耳に残るテーマ曲(『Mystery Movie Theme』)。

おんぼろの愛車・「ブジョー403」でふらりと登場、よれよれのレインコートを身にまとい、緑色の安葉巻を挟んだ手を、櫛の通っていないボサボサの頭にやりながら、「いやあ...ウチのカミさんがね...」と犯人に接近して行く、一見すると風采の上がない中年男。

しかし、その実は、僅かな隙を逃さず一つずつ拾い上げながら、(1作の例外を除いて)ジワジワと彼らを自供に追い込んで行く、我らがコロンボ警部(実際は、lieutenant = 警部補)。

15年前の大学2年時に、『警部補 古畑任三郎』に嵌まっていた私は、昨年11月下旬に学会出張した沖縄で、滞在したホテルのテレビにて、『古畑』のご本家と(今更ながら)初めて向き合い、たちまちコロンボ警部の(軍門に下って)虜となったのです。

この『刑事コロンボ』を含む海外ドラマの各エピソード、それに一本立ちの洋画は、その原題をよく見れば、実に興味深い言葉遊びに溢れているのが判って、いつも感心させられます。

例えば、上述の沖縄出張の際に、私が観た作品名は、『逆転の構図』。原題では、“Negative Reaction”。有名な写真家を犯人に据えた作品だけに、「否定的な反応」の“negative”ではなく、「写真用語の“ネガ”」として使っているところなど、実に巧いものです。

他にも、『偶像のレクイエム』もお気に入り。その名もズバリ“Requiem for a Falling Star”。かつては、ハリウッドの栄光に満ちた大スターだった女優が、全盛期もとうに過ぎて、今はテレビドラマに場を移して...という、「落ちぶれつつある(falling)スター(star)と、本来の意味である「流れ星」との掛詞になっている当たり、思わず膝を打ちます。

「...あ、最後にもう一つだけ、いいですかあ」
 (“Just one more thing.”)

私が直近で観た作品、それは『第3の終章』。

この原題は、“Publish or Perish”。頭韻・脚韻を踏んだこの言葉、実は「論文を発表しない学者は消滅する」(!!)という意味の決まり文句だったので。コロンボ警部の「あともう一つだけ」よろしく、私が最も痛い泣き所を突かれたのは、ここだけの話です。

(與古光 宏)

第12回九州支部大会案内

第12回ATEM九州支部大会を、下記のように開催致します。昨年度は福岡大学で開催しましたが、本年度の支部大会は、九州大学・大橋キャンパスにて、下記の要領で行われます。大会後は、恒例の懇親会で、大いに盛り上がりましょう。多くの方々のご応募をお待ちしております。

日時： 2010年10月30日(土) 13時より

**会場：九州大学・大橋キャンパス5号館
(511, 521, 524教室、および2階ロビー)**

住所：福岡県福岡市南区塩原4-9-1

(西鉄天神大牟田線・大橋駅下車、
徒歩約5分)

懇親会： 場所未定。会費¥4,000程度。

発表応募要領

申し込み締め切り： 2010年7月25日(日)

申し込み先：(事務局長 八尋 春海 宛)

・E-mail：kyushu_office@atem.org

・郵送/FAX：

〒803-0835 北九州市小倉北区井堀1-3-5

西南女学院大学 人文学部 八尋 春海

電話 & Fax：093-583-5720

記載事項：

1. 発表者名(ふりがな)・所属先名・職名
2. 連絡先(E-mailアドレス含む)
3. 発表タイトル
4. 発表概要(日本語発表：日本語で400字、英語発表：英語で200words程度)
5. 使用機器(開催校の都合上、準備が不可能な場合もございますので、予め相談下さい)

*発表時間は質疑を含めて30分間です。

(文責：高瀬 文広)

第16回全国大会案内

「第16回 映画英語教育学会」全国大会が、下記の日程にて開催されます。今回は、2001年の第7回大会以来の、北海道での開催です！多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2010年8月8日(日)

会場：北海道医療大学

札幌サテライトキャンパス (JR札幌駅前)

住所：札幌市中央区北4条西5丁目

アスティ 45 12F

詳細は、本部事務局より後日郵送予定の大会プログラム、および本部ホームページ (<http://www.atem.org/>) をご参照下さい。

九州支部会員 出版案内

『ゴースト～天国からのささやき
スピリチュアルガイド』

(2010年2月07日 出版)

(八尋 春海 監修 / (株)フォーイン スクリーン
プレイ事業部出版 / 2,800円)



今年度は、九州支部の会員10名が参加するという、大掛かりな翻訳に取り組みました。(株)フォーイン スクリーンプレイ事業部出版から刊行される、ケーブルテレビFOXの人気ドラマ『ゴースト～天国からのささやき』のガイドブック、『ゴースト～天国からのささやき スピリチュアルガイド』です。

翻訳者は、50音順に：秋好礼子、今田桂子、小林明子、砂川典子、高瀬文広、田中雅子、新山美紀、八尋春海、八尋真由実、與古光 宏 (敬称略) となっています。

これに取りかかったのは、まだシーズン2の途中までしか放映されていない頃であり、私たち翻訳者は、一般の皆さんよりも早く放送内容を知るといった優越感と、見たこともない番組の内容を翻訳すると

いう苦勞を、同時に経験しました。番組の裏話や解説も豊富で、ぜひご一読をお勧めします。

(文責：八尋 春海)

九州支部新会員 自己紹介

(五十音順、敬称略)

・村田 希巳子

(西南女学院大学・非常勤講師)

大学の授業と言っても、昔然とした、先生が一方的に講義して、学生がノートを取るというやり方は、通用しない時代になった。テレビとゲームの中で育ってきた若者に、どうしたら理解が得られるのかと考える時、映画の大いなる役割を認識せざるを得ない。歴史、文学、文化、宗教、言語において、映像はまさに、百聞は一見にしかず、なのである。この学会では、ソフトとハードの両面から、映像の使い方を学んでいきたいと願っている。

編集後記

映画英語教育学会における全国的活動は、年を経るごとに活発化しております。さて、巷では、政治的、経済的、人間的に、「今の世の中『いいかげんだ』なあ」という言葉が頻出しています。しかし、TPOに従って、『好い加減』という風に考えれば、お互いの間柄も、地域的交流ももっとスムーズに行くのではと思っております。されど、九州支部会の会員同士の繋がり具合は、まさに『好い加減』の最たるものだと思っております。今までの先輩諸氏の、十分なる遠慮による産物だと認識している次第です。このような先見の明を持ち、学会自体の存在意義を知らしめていきたいと思っております。

(中村 茂徳)

お知らせ

これまで、年2回の発行でお楽しみ頂いて参りましたが、ATEM九州支部ニューズレターでございますが、九州支部ホームページの充実ならびに最新情報更新度の速さを考慮いたしまして、大変勝手ではございますが、次回より年1回・夏季の発行とさせていただきます。

つきましては、今後はATEM九州支部ホームページ (<http://www.atem.org/kyushu/index.html>) を、随時チェックして頂けましたら幸いです。

九州支部会員の皆様には、ご迷惑をおかけいたしますが、何とぞご高配賜りますよう、お願い申し上げます。

(文責：ATEM九州支部ニューズレター編集長
與古光 宏)